異文化理解、相互理解・寛容、多文化共生

はじめに

世界では、国や地域によって様々な慣習や文化があり、日本人が旅行や研修に行ったときに日本での常識との違いにカルチャーショックを受ける機会も多くあるだろう。近年、日本はグローバル化が進み、外国人労働者や技能実習生の制度ができるなどして外国人の人口が増加している。そのような状況下で、日本国内でも外国の文化に触れる機会がますます増えている。

異なる文化や慣習に出会ったとき、つい自分の常識で相手を否定したり、相手に対して差別や偏見の目で見てしまったりといった否定的な関わりをしてしまうということがあるだろう。

だが、共に生活する仲間として、異なる慣習や文化をもつ相手と共生する力は今後ますます必要になってくると考えられる。まずは、世界にはいろいろな国があって、同じところもあれば違うところもあるということを知って興味をもつこと、そして、異なる文化に出会ったとき、互いに気持ち良くすごすための関わりとはどのような関わりなのかを考えることを目指して今回の教材を作成した。

この教材の使い方・参加のルール

本教材は、ナミビアに行った経験をもとに作成したため、ナミビアについての内容が多くなっている。しかし、子どもたちに身近な国や子どもたちの住む街とつながりのある国、指導者が行ったことがある国など、ナミビア以外の国にも応用ができるようにしたいと考えてアクティビティ１・２を作成した。ナミビアに限定せず、写真を差し替えたり、補足の説明を加えたりしてアレンジして欲しい。

また、それぞれのアクティビティに使用した資料には解説をつけているため、子どもの実態に応じて学びを深めるために解説を活用してほしい。

全体のねらい

外国の人々の生活や文化は多様であると理解するとともに、異なる文化や習慣に親しみ、関心をもつ。また、多様性を尊重し、共生するためのコミュニケーションの在り方を考える。

アクティビティ1　「ナミビア？日本？どっちだクイズ」

●概　要

まず、教員が提示した写真が日本で撮ったものか、ナミビアで撮ったものかを子どもたちが当てる。例えば、ナミビアの給食として出される白いトウモロコシの粉を練った食べ物“パップ”の写真を見て、「ナミビアですか。日本ですか。」と問う。この場合、見覚えのない食べ物に「ナミビアだ！」と答えを出すのは子どもたちにとって比較的容易である。次に、「これは何の写真でしょう。」と問い、フォトランゲージをする。フォトランゲージを通して、「肌の色が違う。」「手で食べている。」「美味しいのかな。」など、子どもたちの関心を高めていく。最後に、「同じものを日本でも撮りました。」と日本の写真（例であれば日本の給食）を見せて比較することで、日本にある文化や当たり前に感じている慣習を見直せるようにする。

もし授業者が海外の経験があれば、その国の写真に変えて使用すると、授業者のエピソードも交えて話

ができると思うので、写真は適宜変えて使用して欲しい。また、日本の写真については、子どもたちが普段見ている景色やものの写真に置き換えて使って欲しい。

●ねらい

日本とナミビアの文化の共通点・相違点を考えることを通して、外国の人々や文化に親しみ、関心をもつ。

●主な対象

小学１年生〜中学３年生

●用意するもの

・日本とナミビアの違いクイズ（P45の写真１〜７）
・日本とナミビアの旗（国旗の画像を印刷した紙に竹串をつけたもの。少人数なら、旗の代わりに国旗の写真とすずらんテープを用意して行っても良い）
・世界地図や地球儀

●所要時間

30〜45分

●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
１．ナミビアについて概要を知る。 「国旗は日本とは違います。」	国旗の意味について簡単に説明し、我が国や諸外国には国旗があることを理解させるとともに、それを尊重する態度を育てる。
「アフリカにあり、国土に大きな砂漠があります。」	世界地図や地球儀を使って、ナミビアが南半球にあること、時差があること、砂漠が多いことなどを写真や地図を通して話し、ナミビアに興味がもてるようにする。
２．本時のめあてを確かめる。 「ナミビアと日本、同じところと違うところをクイズで知ろう。」	
３．グループが３〜５人になるように分かれて座る。 全体にナミビアの国旗と日本の国旗を紹介する。その後、全てのグループに日本の旗とナミビアの旗を１セットずつ配る。	少人数の場合は、グループに分かれず、あらかじめすずらんテープで場を分けて作った日本エリアと、ナミビアエリア（それぞれエリアに大きな国旗を貼って示しておくと分かりやすい）に参加者が移動してクイズに答える方法もある。

4．「ナミビア？日本？どっちだクイズ」に取り組む。 ⑴ 写真を見てクイズに答える。 「今から各グループに写真を配ります。ナミビアか日本、どちらかで撮った写真です。ナミビアだと思ったらナミビアの旗を、日本だと思ったら日本の旗を揚げてください。」	
⑵ 各グループに写真１－１を配り、相談の時間を取る。	必ずグループで相談して決め、間違っていたとしても互いを責めないことを約束にする。
⑶「『せーの』で正解と思う国の旗をあげてください。」→「正解は、ナミビア（日本）です。」	
⑷ １－１の写真について「この写真に写っている物は何だと思いますか？」と問いかけ、グループで（エリアでする時は近くの人と）話し合う。	
⑸ 同じ施設・場面の日本の写真（写真１－２）をグループに配布し、ナミビアと日本の写真を比べる。「日本（ナミビア）で撮った同じものはこれです。この２枚を比べて気づいたことはありますか。」	正解を求めず、子どもたちの多様な意見を聞いて認めることで、自由に思ったことを言える雰囲気をつくる。
5．⑴～⑸の流れを写真２～７についても同様に進める。	資料・解説（P46）およびアクティビティ１使用写真を使って実態に応じて補足説明をする。
ふり返り	授業をする前と後で、ナミビアの印象は変わったか、考えたこと・不思議に思ったことは何かを問い、次時につなげる。

アクティビティ１　使用写真（見本）

※データはウェブ上からダウンロードしてください。

※写真については、ファイル名に「−１」となっているものがナミビア、「−２」となっているのが、日本の写真です。クイズとしてナミビアのものを先に提示したり、日本のものを先に提示したりと、順番を変えて使ってください。

※写真１−２、２−２、４−２、６−２、７−２は日本の写真です。実践する際は、子どもたちの使っている道具や日々食べている給食、子どもたち自身の写真に差し替えて使用してください。

写真１−１

写真１−２

写真１補足

写真２−１

写真２−２

写真３−１

写真３−２

写真３補足

写真４−１

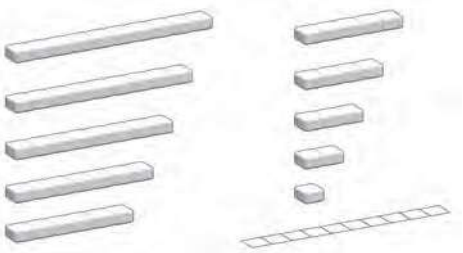


写真４−２

写真５−１

写真５−２

写真６−１

写真６−２

写真７−１

写真７−２

●資料・解説

「写真１-１【給食】」、「写真１補足【給食】」

郊外の学校の給食の様子。トウモロコシの粉をお湯で練り上げて作る「パップ」というものを食べている。この昼に食べる「パップ」が１日の唯一のご飯という子どももおり、そのような子には多めに入れてあげていると現地の教員から聞いた。

「写真３-１【食事（寿司）】」

海に面したナミビアには、良い漁場があり、生牡蠣などの新鮮な海鮮が食べられる。日本にも伊勢海老などを輸出している。

「写真３補足【食事】」

ナミビアでは、海鮮よりも肉をよく食べる。写真は「カトュトュラ」というかつてアパルトヘイト時代に黒人が住むところとして指定されていたエリアの市場に行った時のもの。

「写真４-１【算数ブロック】」

日本のように計算ブロックや時計、計算カードなどが入った「算数セット」がないナミビアでも数概念を学習できるように、現地の海外青年協力隊の隊員が代用品としてペットボトルのキャップを使って指導していた。

「写真５-１【砂漠】」

写真にあるのは、世界最古の砂漠と言われる「ナミブ砂漠」。ナミビアという国名の由来でもある。砂に鉄分が含まれているため、赤い砂であることが特徴的である。

「写真６-１【学校】」

現地の協力隊員が筆算のやり方を教えている算数の授業の様子。

コラム

同じナミビアなのに…？―タウンとロケーション―

６年生に授業をした際、「どうしてファストフード店があったり、お寿司が食べられるところがあるのに、１日一食しか食べられない子もいるのか不思議」という意見が出た。

ナミビア滞在中、車で移動していると「タウン」と言われる都会のエリアと「ロケーション」と言われる郊外のエリアの違いに驚いた。タウンは道が舗装され、豪邸が立ち並び、大型ショッピングモールも見られる。まるでヨーロッパのような近代的な街並みだ。一方で、ロケーションは未舗装道路をガタガタと進み、見えてくる家もバラック小屋のような家だ。ロケーションの学校では、親が失業している子どもが多く、所得がかなり低い家庭が多くあるという。

この国民間の格差は、ジニ係数という貧富の差を示した数値にも表れている。（０に近づくほど所得格差が小さく、１に近づくほど所得格差が大きいことを表す数値。2015年のナミビアのジニ係数は0.59）（国連開発計画HPより https://www.undp.org/ja/japan/blog 最終閲覧日2024年１月16日）大きな貧富の差は、ナミビアの抱える大きな課題の一つである。

アクティビティ2　「なりきりリアクションゲーム」

●概　要

自分と違う文化や慣習に出会ったとき、自分たちがどうやって受け入れていくべきか、相互に理解し合うためにどのような態度を取ると良いかを考えるゲームである。

『世界びっくりカード』には、日本人がカルチャーショックを受けやすい海外の慣習や文化を書いている。今回作者が本や海外経験のある人へのインタビュー、自身の経験などから集めた情報で作成しているが、実態に応じてカードを取捨選択したり、実践者の経験を入れたカードを新たに作成したりして活用してほしい。

●ねらい

・外国の人々の生活や文化は多様であると理解するとともに、異なる文化や習慣を尊重し合うことが大切であることを理解する。
・多様性を尊重し、共生するためのコミュニケーションの在り方を考える。

●主な対象

小学３年生～高校３年生

●用意するもの

・ナミビアびっくりカード（P49）：各班１セット（予め切り離しておく）
・世界びっくりカード（P50）：各班１セット（予め切り離しておく）
　※日本人が海外との文化の違いでカルチャーショックを感じやすい内容を各カードに書く
・なりきりカード（P51）：各班１セット（予め切り離しておく）
・なりきり一覧表（P52）：各班１枚
　※なりきる人については以下の５パターンがあるが、実態に応じて減らしても良い。
　　「いい感人（肯定的なリアクションをする人）」、「やな感人（否定的なリアクションをする人）」、「無感人（無関心な人）」、「ワクワク人（違いを楽しむ人）」、「頑固人（自分が正しいと譲らない人）」

●所要時間

45分～１時間

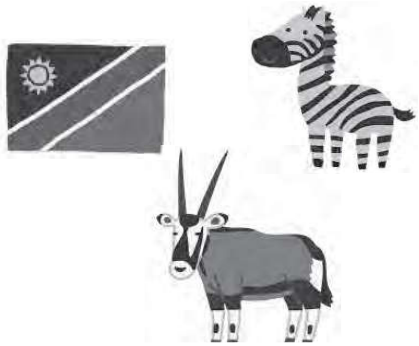
●すすめ方

学習活動・内容・問いかけ	留意点（ポイント）
１．（アクティビティ１に続けて実践する場合） アクティビティ１の感想の中から、カルチャーショックにつながる意見を取り上げる。	実践者自身が驚いたことを、ナミビアびっくりカードを使って話しても良い。
２．本時のめあてを確かめる。 「違う文化に出会ったとき、どんな反応をすると互いに気持ちが良いか、ゲームをして考えよう。」	あらかじめ子どもと「カードで設定された性格の人に成り切るゲームなので、からかったり否定したりしない」ことを約束する。 （子どもの実態に合わせて始めることが肝要。）

3．３～６人の班に分かれる。６．で「なるきる人」を担当する１人を決めておく。	子どもの実態に応じて使用するカードを選ぶ。
4．『世界びっくりカード』、『ナミビアびっくりカード』、『なりきりカード』、『なりきり一覧表』をすべて１セットずつ各班に配る。	
5．『世界びっくりカード』と『ナミビアびっくりカード』をシャッフルし、伏せて山にし、中央に置く。『なりきりカード』も同様に伏せて中央に置く。『なりきり一覧表』もみんなが指を指せるよう、班の中央に置いておく。	机の中央に、『世界びっくりカード』『ナミビアびっくりカード』のシャッフルと『なり切りカード』の２つの山、『一覧表』が置かれている状態。
6．班の誰かが『世界びっくりカード』を上から１枚めくり、表側にする。班のみんなで読む。	実践者は机間巡視をする中で、必要に応じて【資料４】【資料５】の解説を用いて補足説明する。
7．３．で決まった「なりきる人」が『なりきりカード』を引く。何が出たかは他の人には伏せておく。「なりきる人」は出た役割に合わせてリアクションをする。 (例)「やな感人(否定的なリアクションをする人)」→「変なの！」とバカにした態度で言う、など。	リアクションが難しく困っている子どもが多い場合は、一度だけカードの引き直しを良しとするなど、臨機応変にルールを変える。
8．７．のリアクションを見て、班の他の人は『なりきり一覧表』から誰になりきったか考え、人物を選ぶ。	
9．みんなで「せーの」の掛け声に合わせて『なりきり一覧表』の正解だと思う人物を指差す。	
10．正解を確かめ、リアクションに対する感想をいう。	正解・不正解よりも、自分がもし当事者だったらゲームでしたリアクションに対してどう感じるかを考え、望ましいリアクションの在り方を振り返る時間にして欲しい。
11．なりきる人を交代し、６～10を繰り返す。	
ふり返り 「違う文化に出会ったとき、どんな反応をすると互いに気持ちがいいと思いますか？」と問い、考える。	

ナミビアびっくりカード（見本）

※データはウェブ上からダウンロードしてください。

①ナミビアでは、初めて会った人にも、「元気？」と聞かれる。 	②ナミビアのある少数民族は、肌に赤い泥をぬる。 	③ナミビアでは、シマウマやオリックスの肉を食べる。 
④ナミビアでは、車検がない。 	⑤ナミビアでは、給食が唯一の食事という子どもたちがいる。 	⑥ナミビアの多くの人は、手で食べる。はしを使わない。

【資料４】「ナミビアびっくりカード」解説

①ナミビアでは、初めて会った人にも、「元気？」と聞かれる。
→ナミビアでは、“Hello.How are you?”とスーパーのレジでも、レストランでもホテルでも、どこでもまずはこの挨拶を交わす。

②ナミビアのある少数民族は、肌に赤い泥をぬる。
→世界一美しいと言われる「ヒンバ族」は、赤い泥とバターなどを混ぜて作られる“オカ”というものを肌に塗って日焼け対策や保湿をする。

③ナミビアでは、シマウマやオリックスの肉を食べる。
→野生の肉は「ゲームミート」と言われ、ナミビアではメジャーな食べ物である。

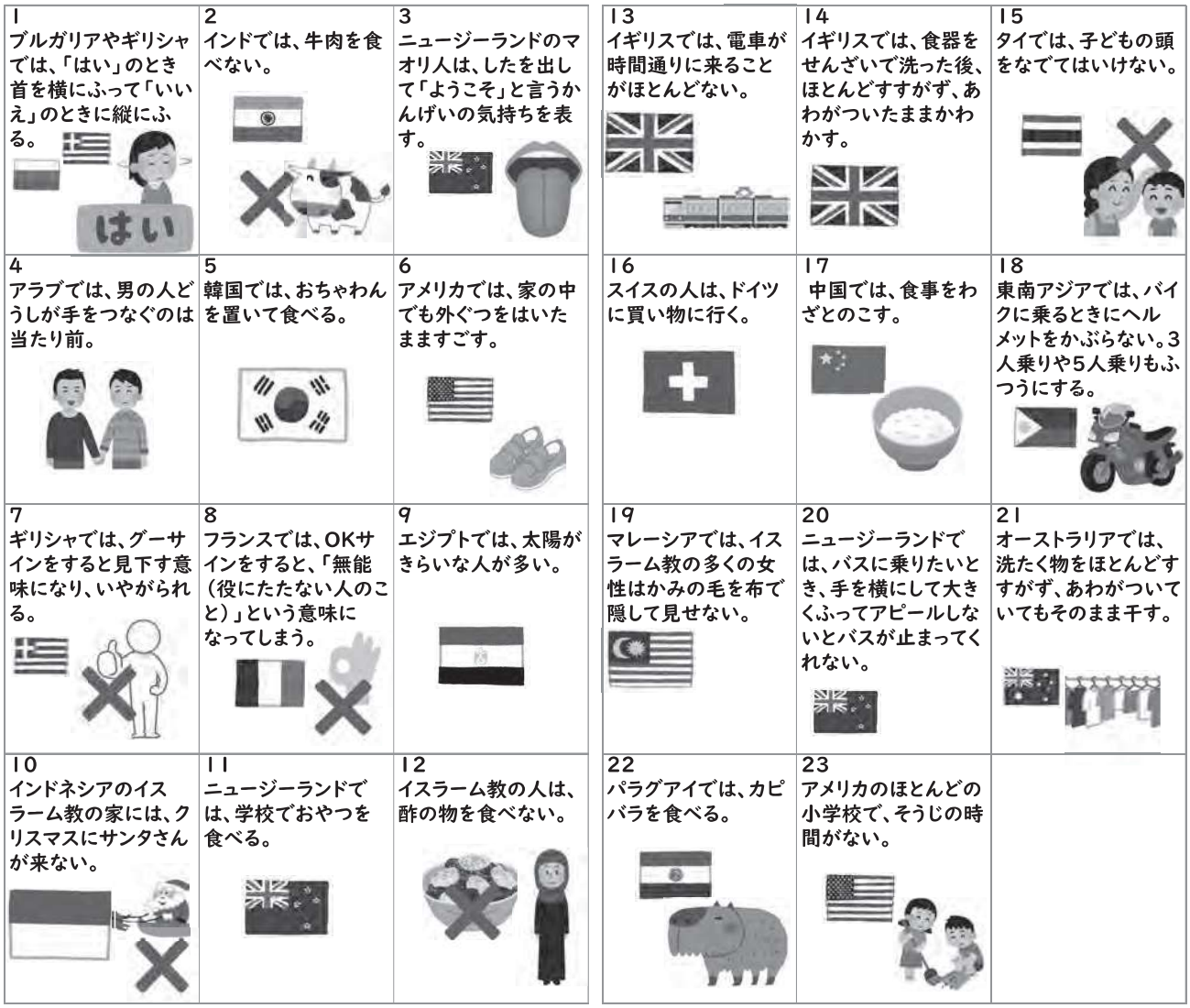
④ナミビアでは車検がない。
→教材作成者が研修で乗った車も、車の窓ガラスがガムテープで止められている状態で、途中飛び石で割れるというハプニングがあった。日本の車検落ちの中古車を使っている人も多い。

⑤ナミビアでは、給食が唯一の食事という子どもたちがいる。
→郊外のエリア（ロケーション）は、親が失業している子どもも多く、所得がかなり低い家庭も多くある。

⑥ナミビアの多くの人は、手で食べる。はしを使わない。
→街中のレストランではフォークやナイフが出るところもあるが、ほとんどの人は手食。

世界びっくりカード（見本）

※データはウェブ上からダウンロードしてください。ナミビアびっくりカードと同じサイズで印刷し、切り分けて使ってください。



【資料５】「世界びっくりカード」解説

2．インドでは、牛肉を食べない。
→ヒンズー教では、牛は神聖な動物とされているため。

7．ギリシャでは、グーサインをすると相手を見下す意味になり、嫌がられる。
→中東でも同じ。

8．フランスでは、ＯＫサインをすると、「無能（役にたたない人のこと）」という意味になってしまう。
→ゼロという意味もある。

9．エジプトでは、太陽がきらいな人が多い。
→エジプトでは日中が高温となり、太陽の暑さが原因であまり太陽に対して良い印象がない。

10. インドネシアのイスラーム教の家には、クリスマスにサンタさんが来ない。
→宗教上の理由から。

11. ニュージーランドでは、学校でおやつを食べる。
→教材作成者の経験から。授業の合間におやつや果物を食べていた。

12. イスラーム教の人は、酢の物を食べない。
→酢にはアルコール分を含むものがあるが、イスラーム教ではアルコールを摂取してはいけない決まりがある。

14. イギリスでは、食器を洗剤で洗った後、ほとんどすすがず、泡がついたまま乾かす。
→教材作成者の友人の経験から。水を大切に使おうとする意識が高い。

15. タイでは、子どもの頭をなでてはいけない。
→頭部は精霊が宿る場所として神聖視されているため。

17. 中国では、食事をわざと残す。
→料理をわざと少し残すことで、食べきれないほど十分にいただき、料理に満足しているということを伝えるため。

19. マレーシアでは、イスラーム教の多くの女性は髪の毛を布で隠して見せない。
→イスラーム教の教えによる。

20. ニュージーランドでは、バスに乗りたいとき、手を横にして大きく振ってアピールしないとバスが止まってくれない。
→教材作成者の経験から。乗った後もバス停のお知らせがなく、自分でブザーで伝えなければならなかったため、気を抜けなかった。

21. オーストラリアでは、洗たく物をほとんどすすがず、泡がついていてもそのまま干す。
→教材作成者の友人の経験から。水が貴重で節水の意識が高い。

なりきりカード（５種類）

※切り離して使ってください。
※班の人数、参加者のタイプに合わせて使用カードを選んで下さい。
※白い欄を使って別のキャラクターを作っても良い。

なりきりカード

●だれになりきっているか考えて、
グループの人と「せーの」で指さそう。

こう定的なリアクションをする人
いい感人

ちがいを楽しむ人
ワクワク人

きょうみがない人
無感人

ひ定的なリアクションをする人
やな感人

自分がぜったい正しいとゆずらない人
がんこ人

コラム

クリスマス会

二学期末にご褒美として「クリスマス会」をしたり、クリスマスの歌を教室で流したりする学級は少なくないと思う。私も担任している学級で「クリスマスパーティー」として、クリスマスにちなんだレクリエーションをし、12月25日の登校日には、サンタさんにもらった物の話で子どもたちと盛り上がった。

小学校教員の友人と冬季休暇中に会った時、お楽しみ会の話題になった。その時友人は、「クリスマス会はうちの学級ではしないし、サンタの話題も教員からは出さない」と言った。イスラーム教を信仰している家庭があるからとのことだった。それだけでなく、家庭の経済状況からプレゼントをもらえない家庭もあるかもしれない、ということも考えてのことと話してくれた。

クリスマスパーティを行う前に、「もしかしてこの話をして疎外感を感じたり、辛い思いをしたりする子どもがいないだろうか」と少しも考えなかった自分に気づき、反省した。グローバル化が進む世の中で、「もしかして」と相手の文化的背景や生活環境を慮る気持ちを持っていたいという思いが湧き、この教材を作るきっかけとなった。

参考文献・引用資料

・「世界びっくりカード」１～５：『世界とであう えほん』辻原康夫、パイ インターナショナル、2012年
・「世界びっくりカード」６～９：『常識はひとつじゃない？』〔池上彰・増田ユリヤの今だからこそ世界を知ろう！シリーズ〕池上彰・増田ユリヤ、汐文社、2016年
・「世界びっくりカード」10～24：教材作成者と作成者友人の体験談より

実践事例報告

プログラム作成・実践者　勝部知早野　　学 校 名　浜田市立長浜小学校

担当教科　全教科

実践教科　学活

単 元 名　「ちがいについて考えよう。」

【授業の概要】

※この授業はアクティビティ１の後に行った実践事例で、アクティビティ２とは異なる（この実践を踏まえて作った改善案がアクティビティ２である）。授業は⑶の流れで行った。

⑴ 単元のテーマ：差別と区別、基本的人権

⑵ 単元のねらい

「あっていいちがい」と「あってはいけないちがい」について考えることを通して、差別と区別や基本的人権について気づけるようにする。

⑶ 授業の概要

様々な事例を通して、差別と区別や基本的人権について考え、分類する。

（流れ）

１．本時のめあてを確認する。
「あっていいちがい」と「あってはいけないちがい」について考えよう。

２．12種類の「ちがい」について、全員で意味や内容を確認する。

３．確認した12種類の「ちがい」を「あっていいちがい」と「あってはいけないちがい」に分け、考えたことや分けた理由などをワークシートに記入する。

・「○○はどっちに入るかわからないから、とりあえずわからないに入れておこう。」

・「△△は絶対にあってはいけないと思う。」

４．グループで話し合ったことを全体で発表し、根拠や分類の仕方を検討する。

５．差別・個性・区別の違いについて知り、自分たちの生活をふり返る。

【授業で使用したワークシート】

“ちがい“シート

名前（　　）　○△×　理由

①日本では、外国語として英語を3年生から勉強する。ナミビアでは1年生から勉強する。		
②日本では、なろうと思えば夢も目指すことができる。ナミビアでは経済的な理由から夢を叶えられない子どもがいる。		
③Aさんのはだの色は白いのでバスに乗っても良い。Bさんのはだの色は黒いのでバスに乗ってはいけない。		
④ナミビアのある学校では3つの言葉ごとにクラスが別れていて自分の言葉で勉強することができる。日本の学校では主に日本語で勉強する。		
⑤ナミビアの子どもたちは、お昼ご飯しか食べられない。日本の子どもたちは朝・昼・夜3回お腹いっぱいにご飯を食べられる。		
⑥タウンに住んでる人は、毎食食べられる。ロケーションに住んでいる人は一食しか食べられない。		
⑦日本ではお箸で食べるが、ナミビアでは手で食べる。		
⑧ナミビアの子どもたちは算数セットがない。日本の子どもたちは算数セットがある。		
⑨Aさんは、からかっても言い返さないからバカにする。Bさんは、からかったら言い返してくるからバカにしない。		
⑩Aさんは、外国人だから日本のアパートに住んではいけないと言われた。Bさんは、日本人だから日本のアパートに住んでもいいと言われた。		

(4) 児童の感想や学び・気づき

「ちがい②」については意見が分かれた。「お金がないから仕方がない」という意見と「子どもの夢を経済的な理由で壊すのはよくない、かわいそうだ」という意見があった。中には、夢を叶えられるように募金活動とかをして助けてあげたらいいと思う」という意見を持つ児童もいた。

「ちがい③」については、「人種差別」という用語を知っている児童も多く、黒人差別についての歴史を話し、学ぶきっかけになった。

「ちがい⑥」については、１時間目に学習した知識を使って「タウンとロケーションに分かれていることから、まずおかしいと思う。同じ国なのに違うのはおかしい」と考える児童や、「どこに住んでいてもみんな毎食食べられるようにすべき」という意見が出た。

(5) 児童の様子

１時間目にアクティビティ１に取り組み、ナミビアの現状について想像して考えを持てている児童がいる一方で、馴染みのない国のことなので問題をイメージしにくく、ちがいの善悪について考えるところまで至らない児童も一定数いた。グループになって考えることで意見の交流はあったが、考えるべき「ちがい」が多すぎた、全体で議論を深めるところまで時間的に到達しなかった。

【授業実践をした上での感想・ふり返り】

直接ナミビアに行って経験してきたことをもとに作っている「ちがい（問い）」であるため、授業者が簡単にイメージできる問題も、海外の国自体に馴染みがない児童にとっては状況の理解そのものが難しいのだと痛感した。また、ちがいの中に「差別」「基本的人権の保障」「異文化理解」など複数の観点が混ざっていたため、より考える視点が複雑になり、６年生の児童にとっては難易度が高い活動となってしまった。

これらの反省から、初めて海外に触れる児童にとっても分かりやすく、楽しみながら活動できるようにするために、ナミビアに限定せず様々な異文化を知るゲーム性のある活動にするようにしたいと考えた。また、考えるべき観点を「異文化理解」に絞ることで、考えが深まるようにしたいと思い、アクティビティ２の「なりきりリアクションゲーム」の教材を開発した。